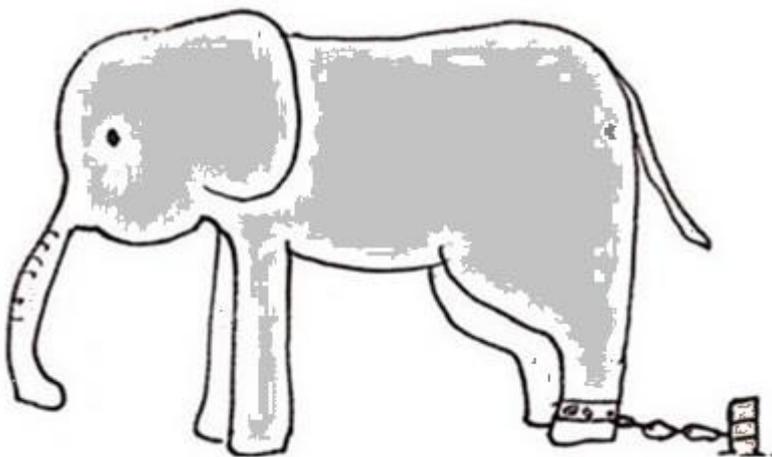


サーカスの象理論^{ぞう}

～鎖につながれた象の寓話～

サーカスの象は、ロープで杭につながれてじっとしている。杭を引き抜くだけの力を持っているのに、なぜその力を発揮して逃げ去らないのでしょうか？

答えは簡単です。「自分にはたいした力がない」と思い込んでいるからです。象は子供の頃、鎖で杭につながれて毎日を過ごしました。小さいのでたいした力がなく、杭を引き抜くことができません。象は大きくなってからも、その思い込みにとらわれ続けます。調教師はそれを知っているから、鎖のかわりにロープを使って象をちっぽけな杭につなぎとめます。大きな象にとって、ちっぽけな杭を引き抜くくらいはたやすいはずですが。しかし、象は「自分にはたいした力がない」と思い込んでいますから、何もせずにじっとしています。



※この「サーカスの象」という話は、アレクサンダー・ロックハートが書いた「自分を磨く方法」という本に掲載されているエピソードです。

【私たちは大丈夫か？】

私たちもこの「サーカスの象」のようになっていないだろうか？「自分にはたいした力がない」と思い込んでいないだろうか？

何か成し遂げたいことがあれば、まずは自分の可能性を信じてみようではないか。象が巨木を引き抜く能力を持っているように、私たちも非凡な能力を持っているのです。それに気づけば、自分を信じることもでき、山をも動かす強い原動力となります。

【学習性無力感】



人間社会において、ある状況下で不快な体験をし、何をしてもその状況を変えることができないことが続くと、「諦め」のような感覚が生じ、自発的行動すら起こせなくなる現象のことを、心理学で「学習性無力感」(※)と言います。無気力は伝染すると言われております。恐ろしいのは、個人で学習した体験がそれを体験したことがない人間まで疑似体験として伝染し、企業風土に影響を与えてしまうことです。

需要が減退して市場が縮小すると、諦めムードが漂い、せつかく提案された新しい商品企画や販売手法に対しても、初めから無理な理由や「出来ない」言い訳を探してしまいがちです。「何をしても無駄」という無気力が蔓延してしまったら、その企業に未来はありません。

【カマス理論】

カマスは、歯が鋭くて肉食（魚食）の白身魚です。どう猛です。カマスの中には、体長180センチにもなり、人間を襲う種類もいるそうです。

水槽にカマスを入れ、その中にエサとなる小魚を放り込むと、鋭い歯で襲いかかると言います。次にその水槽に透明の間仕切りを設け、一方にカマス、一方に小魚を入れます。するとカマスは、エサを食べようとして何度も何度も間仕切りに体当たりを繰り返しますが食べることができず、最終的には諦めて間仕切りをはずしても小魚を襲わなくなると言います。

サーカスの象が、細いロープ1本で繋がれているだけなのに逃げ出さないのも、理屈は同じです。象とカマスは諦めることを学習した訳です。

【人事の効果】

そして、「カマス理論」には続きがあります。間仕切りをはずした状態で新たに別のカマスを一匹だけ水槽に入れる。当然新しいカマスは、小魚に襲いかかります。すると、それを見た最初のカマスは、まるで目が覚めたように猛然と小魚に襲いかかるそうです。

人間社会でも組織が停滞すると、思い込みや諦めを招く「仕切り」ができやすい。それを取り除き活性化させるためには、新しいカマス（人材）を放り込むことも1つの方法です。

小魚を襲わなくなったカマスを目覚めさせるように、人事の効果は絶好の機会であると言う事です。

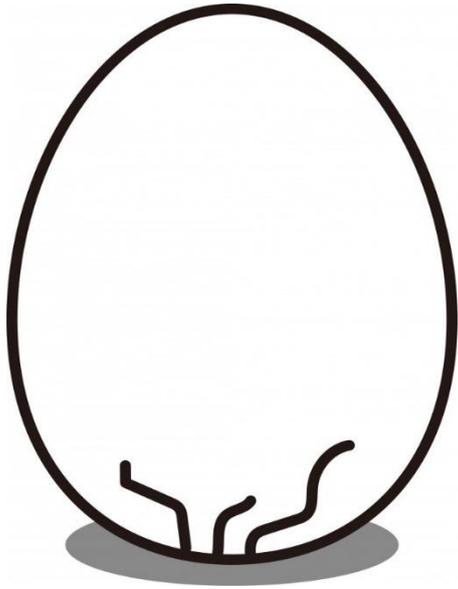
【固定観念に縛られるな！】

サーカスの象は自分が無力であること、またカマスはエサを食べられないこと、その記憶が頭にこびりついているため、自分の力を試そうとしません。私たち誰もがこの象とカマスのような部分を持っています。過去の経験、失敗、子供の頃に出来なかった事。ただそれだけで、私たちは沢山のことを「出来ない」と思いながら生きています。記憶の中にひとつのメッセージ（固定観念）を刻み込んでしまったため、もう二度とその杭から自由になろうとせず、小魚に襲いかかることもしないのです。

時々、私にも「足かせ」がついている気がして考えます。今もこれからも絶対に「出来ない」と思い込んでいることがありはしないか。出来るかどうか分からないときは、出来ると思って努力する。全身全霊で取り組んでみるしかない。全身全霊をかけて！命がけで！

【町の開発の発想点】

明和町の開発を考えたとき、明和町に「病院」など出来るはずがない、「温泉」なんて出るはずがないと「出来ない発想」をしたらすべてが出来なくなってしまいます。こうした開発をするにあたっては、県の許可が必要になります。県の許可をもらうだけでも物凄い時間と労力がかかります。そして地権者の皆様との協議、国との農政協議、開発資金の調達、出店企業との交渉、どれか一つでもダメでは完成になりません。しかし、何とかしなければ「明和町の明日がないのだ！」と思い、地域の生き



【コロンブスの卵】

残りを賭けて戦います。「持続可能なまちづくり」と簡単に言いますが、「出来る」と思って覚悟を決めてやるしかないのです。「失敗したらどうする」「出来なかったらどうする」そんな事は失敗しないようにやる。出来るようにやる。真剣に命がけでやるしかない。これは、明和町の命運をかけた戦いなのです。

そして、誰かがやって見せれば簡単に出来るではないかと思われま。まさに、コロンブスの卵ですね。

【私たちの町をつくるという事】

私たちは、どうしたら素晴らしい町に出来るかを常に考え、前に進まなくてはなりません。決して、出来ないと諦めた「象」や「カマス」になってはならないのです。何もしなければ楽です。しかし、常に上を見て夢を追い続ける。座して死を待つか、行動して活路を開くかです。その時、一生懸命にやっているると必ず一筋の光が見えて来る事を信じましょう！そして、それが数々の実績となって町を活性化する原動力になっていることに皆様も気づいて戴ければと思います。

オールインワンの町づくり



(※)「学習性無力感」・・・米国の心理学者マーティン・セリグマンが1967年に発表した概念で、抵抗することも回避することも困難なストレスに長期間さらされ続けると、そうした不快な状況下から逃れようとする自発的な行動すら起こらなくなる現象をいいます。セリグマンたちは犬を用いた実験によって、「自分が何をしても状況は変わらない」という思い＝無力感が体験から学習されるものであることを発見しました。「学習性絶望感」や「学習性無気力」とも呼ばれ、一種の抑うつ状態や学業不振にいたるメカニズムの一つとしても注目されているそうです。

令和3年7月1日

明和町長 富塚もとすけ